

何が見抜けましたか？ そうですね、語末「い/i/」の「形容詞」の多くは、重いー軽い、暑いー寒い等、対の関係を持って事物の状態・性質・属性を表しているようです。一方、語末「しい/shi・i/」の「形容詞」は、事物の状態・性質・属性を表すというよりは、騒がしい、可愛らしい、羨(うらや)ましい等、事物に対するひとの情意とか心的判断を表しているようです。

途中、「い/i/」で終わる色を入れていました。「黄色い」は中に色という文字が入るので「い/i/」で終わる色としていませんが、日本語において「い/i/」で終わる色は、どうやら赤と青と黒と白だと思われます。このことは何を意味するのでしょうか？ どうでしょう？

奈良の明日香村にキトラ古墳というのがあって、そこには青龍(せいりゅう)・白虎(びやっこ)・朱雀(すざく)・玄武(げんぶ)という神獣が描かれています。東西南北を神獣が掌(つかさど)るという世界観は朝鮮・中国の影響だと思いますが、それぞれ神獣名に青・白・朱(赤)・玄(黒)と、「い/i/」で終わる色の名前が入っていることは興味深いことだと思いませんか？ 古代の日本において、色の概念は4色だったかも知れません。または、日本人以前の朝鮮・中国語においても、色の概念が4色だったのかも知れません。ちょっと知っておいて良いと思うのは、色名の数は言語によって違いがあるということです。パプアニューギニアのダニ語では、色の名前は2つしかないそうです。だからと言ってダニ語を話す人達が色の違いを区別できない訳ではなく、心理学的なテストによって色の名前が無くとも、種々の色を区別していることが示されているようですⁱ。

もうひとつは、語末「な/na/」の「形容詞」でした。日本の学校文法では「健康である/de-aruru/」と書いたりすることができることから、「形容動詞」とされています。「健康」という抽象名詞に「だ/da/」とか「である/de-aruru/」を付けて述部にもできるから「形容動詞」。随分矛盾した品詞名と思われませんか？ これに対して寺村秀夫という学者は、「ナ形容詞」と呼んだりしていましたⁱⁱ。不思議です。一国の国語の文法において、一番の基礎となる品詞が上手く分類できていないのです。英語において‘adjective(形容詞)’と‘verb(動詞)’が区別されないなんてことはないですよ。

ご存知でしたか？ 日本語って、現在の学校文法の元になっている橋本進吉という学者による橋本文法以外に、山田孝雄(よしお)という学者による山田文法、松下大三郎(だいざぶろう)による松下文法、時枝誠記(ときえだ もとき)による時枝文法なんてものがあるのです。それ以外に、明治以前の国語学の流れにおいて国文法という文法観も存在していました。それぞれ特徴や異なりがある中で、橋本文法が学校で教える文法の元として仮に選ばれているのです。本能的に何かおかしいと直感しませんか？ 驚くべきことだとぼくは思うのですが、実は日本は今現在においても、自国語を説明する文法を見出せていないのです。ただそれでは収拾がつかないので、先ほど述べた橋本進吉という学者が唱えた文法を、学校で教える文法として使っているに過ぎないのです。

話が横道に逸(そ)れましたが(毎回ですね)、語末「な/na/」の「形容詞」には、見抜けることがあります。どうでしょうか、考えてみてください。そうです、基本「抽象名詞」と呼ばれるものの後に「な/na/」が付くことで「ナ形容詞」と呼ばれるものができているのです。ただ、「抽象名詞+な/na/」だけのパターンが「ナ形容詞」を作っている訳ではないのです。次の事例を見てみてください。

(2) 綺麗な、健康な、愉快的な、尊大な、豊富な、賢明な、平和な、見事な、簡単な、困難な、立派な、有名な、

無駄な、静かな、遥かな、惨めな、豊かな、華やかな、涼やかな 等

前半は、「綺麗・健康・愉快・尊大・豊富・賢明・平和・見事・簡単・困難・立派・有名・無駄」といったように、漢字 2 字の抽象名詞に「ナ/na/」を付ける形で語形成がなされています。これは中国から仏教と併行して輸入した抽象概念を、日本語の中に取り込むために平安時代以降「ナ/na/」を付ける工夫がなされたからと推察できますⁱⁱⁱ。

ここで、「中国から仏教と併行して輸入した抽象概念を、日本語の中に取り込むために「ナ/na/」を付ける工夫がなされた」と書きました。何か気が付かれましたか？ 古い日本語には、「綺麗・健康・愉快・尊大・豊富・賢明・平和」等といった「抽象名詞」は無かったのかと思われませんでしたか？ 古い日本語、現代日本語の元となっている言語を「やまとことば」と呼んでおきますが、「やまとことば」は「抽象名詞」を生み出していないのです。どうしてそんなことが言えるのでしょうか？ 試みに「綺麗・健康・愉快・尊大・豊富・賢明・平和・見事・簡単・困難・立派・有名・無駄」を声に出して読んでみてください。気が付かれましたか？ そうです、これらはみな「訓読み」ではなく「音読み」される語なのです(あれ？、「見事」は訓読みですね...、元あった「みこと/mi-koto/」という「やまとことば」に漢字を当てはめ、「みことなる/mi-koto-naru/」が「見事なる」から「見事な」と変遷したものでしょうか)。ただここで「音読み」されている語ということは、元々の日本語である「やまとことば」ではなく、「漢語」由来の語であると判断できます。つまり、日本語の元である「やまとことば」にとっては、これらの語は「外国語・外来語」なのです。日本語って、なかなか気付きにくいのですが、「ゲーム、オフィス、ドラマ、コミュニケーション、ディベート」等とカタカナで外国語を取り込む以前に、大量の外国語を「音読み」する漢語の在り方で取り込んでいるのですね。どうなんでしょ、このような工夫で語彙を生成している言語って、他にもあるのでしょうか？ 韓国語なんかは今では日本語とは逆に、漢字を捨ててハングル文字だけを使う方向へ変遷してしまいましたが、象形・表語文字である漢字を捨てるということは、代々先祖が積み上げてきた言語文化を、捨てていることになりはしないのでしょうか？ どうなのでしょうね...

さて、中国語から取り込んだ「抽象名詞」を「形容詞」に転化することが可能であった理由は、もともと日本語にあった「静か・遥か・惨め・豊か・華やか・涼やか」という名詞に、「なり/na-ri/」・「なる/na-ru/」の語尾を付けることでの活用から、「な/na/」を付ける短縮用法も生じていたからだと思います(あれ、「やまとことばって」、漢語のように理知による抽象名詞は生み出していませんが、感性による抽象名詞は「か/ka/」を語末に付けることによって生み出していそうです。「か/ka/」には「化/ka/」の意味が込められているのかも知れません)。外来語である「抽象名詞」に「な/na/」を付けることが可能となっている原理は、日本語古語の「なり/nari/」が、「に/ni/」+「あり/ari/」の合成語(/ni+/ari/→/nari/)としてあり、その「なり/nari/」の連体形「なる/naru/」が「な/na/」へと音短縮されたからだと考えられるからです。つまり、「静かなる湖」・「遥かなる山並」が、「静かな湖」・「遥かな山並」のように音短縮されると考えられるのです。

どうでしょう、ここまでの事例を観察・分析するだけでも、随分多くのことが見抜けるように思いませんか？ ぼくがみなさんに言語研究(その中でも認知言語類型論)を少し齧られることをお薦めする理由はここに 있습니다。つまり、言語、特に日本語って、日本人の誰の目の前にもありますよね。毎日、聞き・話し・読み・書く、誰からも隠されていないものだと思います。誰に対しても隠されていないにも関わらず、それを改めて自身の頭で観察・分析すると、思いも掛けないものが、次から次へと姿を現してきます。ぼ

くは生徒達や学生達に授業の中で、「世の中で何でもないとされているものが、何でもなくなっている理由の後ろには、とんでもないものが隠されています。それを見抜くことが、学びの本質です」と話します。

それでは、日本語の「形容詞」と呼ばれているものの最本質を、みなさんと一緒に見抜いてみましょう。これが見抜けたとき、みなさんは「マトリックス」の世界に目覚めたネオへと変身することになると思います。ただし、みなさんがネオとして「マトリックス」の世界に覚醒するためには、ブレイク・スルーが生じる時点まで自身で考え抜くことが求められます。それが、覚醒への唯一のパスポートなのです。以下に英語の事例を挙げます。それに対して右側に日本語訳を書くことで、見抜きを行っててください。

- (3)-1. a. I'm glad / sad to hear the news. ⇔
b. He is glad / sad to hear the news. ⇔
c. He is gentle / cruel to others. ⇔

どうでしたか、日本語訳は次のようになりましたか？

- (3)-2. a. 私はそのニュースを耳にして嬉しい/悲(哀)しい。
b. *彼はそのニュースを耳にして嬉しい/悲(哀)しい。
c. 彼は他の人に優しい/冷たい。

(3)-2b の日本語訳に関して、日本語の感覚が鋭敏なひとは、「彼はそのニュースを耳にして嬉しそう(だ)/悲しそう(だ)」と訳しているかも知れませんね。そうなのです、中野が(3)-2b の日本語訳としている「*彼はそのニュースを耳にして嬉しい/悲(哀)しい」という文は、日本語の文法として適格ではないのです(*のマークが、適格でなく非文であることを表します)。日本語で「私は嬉しい/悲(哀)しい」は言えますが、「彼・彼女・あなた・彼ら・彼女ら・あなたがた」という 3 人称または 2 人称に対して、「嬉しい/悲(哀)しい」とは言えないのです。これが理由で、みなさんは 3 人称とされる「彼」のとき、「嬉しそう/悲(哀)しそう」と「そう」を付けられたと思います。英語において“**He is glad / sad to hear the news.**”という文は、非文ではないですね。he が she や you や they 等にも変わっても非文ではないです。何故でしょう？ また日本語においては奇妙なことに、同じ「しい/shi-i/形容詞」であっても、「優しい/冷たい」は、「彼・彼女・あなた・彼ら・彼女ら・あなたがた」に対して使うことができます。(3)-2c を見てください。「彼は他の人に優しい/冷たい」は不自然ではありませんね。不思議に思われませんか？ この段階で見抜きができたひとに、ぼくからお伝えすることはありません。最初中野は、日本語でなぜそんな言語現象が生じるのか、よく判らなかつたのです。ところがこの「悲(哀)しい」という「形容詞」に関しては、次のような事例が生じているのです。

- (4) a. キャンドルを暗くして スローな曲がかかると…
かたちのない優しさ それよりも見せかけの魅力を選んだ
OH! KAREN 誰より君を愛していた 心と知りながら捨てる
OH! KAREN 振られたぼくより哀しい そうさ哀しい女だね君は

「恋するカレン」 曲・歌：大滝詠一 詞：松本隆

b. 指に光る指環 そんな小さな宝石で 未来ごと売り渡す君が哀しい

「硝子の少年」 曲：山下達郎 詞：松本隆

一度聴いていただければ嬉しいのですが、どちらも松本隆の作詞によって、大滝詠一及び KinKi Kids の代表曲となったものです。先ほど 2 人称・3 人称に対して「哀しい」を用いることはできないといましたが、この歌詞における「哀しい女だね君は」という表現に対しても、「未来ごと売り渡す君が哀しい」という表現に対しても、違和感はありません。ごく自然にこの表現を受け入れ、これらの歌に込められている想いを受け入れることができます。何故でしょう？「君は哀しい」と言えないのに、「君は哀しい女」とか「君が哀しい」とか言えてしまったりするのです。ここに、日本語で「形容詞」と呼ばれる品詞カテゴリの最大の謎が存在しています。何故、「君は哀しい」は通常言えないのに、この歌の中では「君は哀しい女」とか「君が哀しい」とか言えてしまうのでしょうか？このお題に答えてもらえたらと思います。自身を納得させられる説明ができれば、中野が書く説明を読んでみてください。

<日本語の「しい/shi-i/形容詞」に対する見抜き③>

(All Rights Reserved)

-
- i エレノワ・ロッシュ(Eleanor Rosch) (1992) Francisco J. Varela, and Evan Thompson. *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience* New York: The MIT Press.
 - ii 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』I くろしお出版
寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味』III くろしお出版
 - iii 『源氏物語』において、紫式部は当時の日本語でできる表現の幅を増やすために、
○○語もの「形容詞」を発明しています。